PROJECT

# 素材、道具、音──社会的過程の中で変形するモノとして「楽器」を捉える

文・写真
佐本英規

共同研究【若手】● 演じる人・モノ・身体──芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点（2014-2016 年度）

2014 年度に始まった本共同研究は、人とモノの関係に焦点をあてるマテリアリティの人類学の関心を、演劇やダンス、音楽といった芸能を対象とする研究に応用し新たな芸能研究の視座を探求している。2 年目となった 2015 年度には 3 回の研究会が開催された。本稿では 2015 年 10 月の第 2 回研究会で筆者が行った研究発表の内容を紹介する。

## モノに焦点化する音楽人類学

音楽人類学・民族音楽学は、楽器そのものや、楽器と人との関係を、古くから主要な研究テーマのひとつとしてきた。近年では、本共同研究の代表者である吉田ゆか子（東京外国語大学）がマテリアリティの人類学と呼ぶ「人とモノの相互的な働きかけによって出来事が生成する過程」（吉田 2015）に焦点化するアプローチから、楽器を媒体とする人とモノのネットワークや、楽器の製作や使用を通して人と環境、社会との関係が作られるプロセスを考察する研究がじょじょに蓄積されている（Bates 2012 ほか）。そうした動向は、音楽作品の自律性や音楽美学の普遍性を前提とせず、社会や文化への単純な還元論も回避し、モノや身体、音を媒体として作り出される出来事として音楽を捉える近年の関係論的な音楽社会学・音楽人類学のアプローチと関わりが深い（Born 2010）。

出来事としての音楽は、絵画や彫刻のように単一のモノをエッセンスとする芸術作品と異なり、楽器や音響機器といった複数の分散したモノを媒体として成り立つ。そうした媒体としてのモノに焦点化する音楽の研究は、視覚表現や造形物を主な分析対象としてきたモノに焦点化する芸術の人類学の枠組みを拡張するものとして期待されている（Born 2013: 137-141）。また、音楽は、モノから逃れ出る捉えどころの無さによって特徴づけられる場合もあれば、作品として、あるいは質感をともなう音それ自体として、モノのように取り扱われる場合もある。モノではないが、ときにモノのように立ち現れる音楽のあり方を考察することは、マテリアリティの人類学が焦点をあてきたモノという概念の再考を促すものでもある。

筆者の研究課題のひとつは、こうしたアプローチを用い、ソロモン諸島における楽器を事例として、出来事としての音楽における人とモノと音との関係を考察することにある。

切り出した竹筒を筏状に結束する（2013 年 6 月、ソロモン諸島、マライタ島）。

## 竹から楽器へ、楽器から音へ

南太平洋のソロモン諸島マライタ島南部、アレアレ（*'Are'are*）地域の村では、家屋の屋根や壁にサゴヤシの羽状葉が用いられ、蔦植物が紐やロープに加工されるといったように、多くの植物が生活の様々な局面で利用される。アレアレ語でアウ（*'au*）と総称される竹もまた、食材を詰めて蒸し焼きにする調理具や、家畜を囲う柵の材料などとして用いられる有用植物である。竹筒を切り出して筏状に結わえることで作製され、儀礼祭宴や観光ショーといった機会に演奏される竹製パンパイプスは、そうした竹を素材とする道具のひとつにほかならない。

竹製パンパイプスは、素材である竹と同じくアウという語によって総称される。1970 年出版のアレアレ語辞書には、アウの語義として、竹の総称と楽器・音楽の総称という 2 つの名詞的用法が記されている（Geerts 1970: 15）。1969 年から 1977 年にかけて断続的に調査を行った民族音楽学者ゼンプは、アウという語が広義には竹を、狭義には竹を素材とする楽器を意味し、さらに楽器によって生み出される楽音へと拡張的に用いられることを指摘した。ゼンプはまた、音程や旋律などといった音楽的事項が竹の形態や長さを表す語によって概念化されることに着目し、アウという語の多義性に基づく隠喩的用語法を手掛かりとして、民族音楽理論を描出している（Zemp 1979）。

モノに焦点化する音楽人類学の観点から、竹製パンパイプスが製作され、道具として扱われ、演奏され、聴取される社会的過程に着目すると、アウという語がはらむ意味論上の多義性を、ゼンプとは異なる仕方で理解することができる。竹製パンパイプスの担い手は、熱帯雨林に群生する竹（アウ）を伐採して加工し、特定の音階に基づいて調律することで楽器（アウ）を製作する。楽器（アウ）は名づけられ、ときに供犠を施され禁忌の対象とされることによって、個性を持つほかならぬ楽器（アウ）として完成される。興味深いことに、楽器（アウ）は息を吹き込まれることで「鳴く」ものだと考えられている。竹製パンパイプスの「鳴き」として聞き取られる音（アウ）は、聞き手の心を満たし、魅了し、貝貨や豚、現金といった富を演奏者に対して思わず差し出したい気持ちにさせる呪術的な効果を発揮するとされる。竹製パンパイプスを社会的過程の中におかれたモノとして捉えるとき、アウという語の多義性が示唆するのは、同じアウという語で呼ばれながら、素材から道具へ、道具から音へと変形するプロセスを内包する、モノとしての「楽器」のあり方である。

そうした竹製パンパイプスは旧来、祖先崇拝と関わりの深い儀礼祭宴で演奏されてきた。しかし今日では、アレアレ地域の村落で行われるキリスト教祭礼で演じられるほか、首都で催される観光ショーなどで現金収入を目的に演奏される場合が多い。また、とくに近年、海外での音楽イベントに頻繁に出演し、オーストラリアや日本などのレーベルからアルバムをリリースする演奏集団も現れている。竹製パンパイプスとその音は、商品化のプロセスにおいて、新たにデジタルな複製物へと変形を遂げつつある。

### モノの不安定性と向き合う

すでに述べたようにアレアレの村では、床材としての檳榔樹や、屋根材としてのサゴヤシの羽状葉など、多くの植物が建材として利用される。年間を通して高温多湿な熱帯雨林の環境にさらされる家屋は、建材の部分的な取り替えや全面的な新調、絶え間ない修理を必要とする。植物素材によって建てられた家屋に暮らすことが、絶えず劣化する家屋を維持し続ける終わりのない営みであるように、アレアレの村において植物を利用することとは、植物素材の不安定性を抑制し、その劣化に対応することにほかならない。

竹製パンパイプスの製作においても、素材としての竹の不安定性を抑制するために様々な工夫が凝らされる。竹の伐採に際しては、群生する数種の竹のうち、固く稠密なアウラパ（*'au rapa*）やアウハウ（*'au hau*）と呼ばれる竹（前者は学名 Schizostachyum tessellatum、後者は Nastus obtusus と推定）が適材とされる（Henderson and Hancock 1988: 199-203）。伐採された竹は、加工後の伸縮による音高の変化を抑制するため、数ヶ月にわたって日に干して乾燥させられる。加工に際しては、既製の楽器と比較して音高が同一になるように細心の注意を払って竹筒が削り出される。複数の竹筒を結束して出来上がった楽器は、竈や石蒸焼き用の炉の上にかざされて煙で燻される。表面を煤に覆われて飴色になった楽器は、伸縮しづらく音高が狂いにくいという。製作が終わった後も、音高を一定に保つための調整が継続的に施される。このように、竹製パンパイプスを製作する技法は、植物素材の不安定性を抑制し、その変化に対応することに焦点化している。

村で催された祭宴での竹製パンパイプスの合奏。手にマイクを持った歌手と共演している（2009 年 9 月、ソロモン諸島、マライタ島）。

複数の楽器を複数の吹き手が同時に演奏し、それぞれの楽器に割り当てられた旋律を組み合わせる竹製パンパイプスの合奏において、気温や湿度の変化によって竹筒が伸縮して生じる音高の誤差を調整することは、演奏のたびに繰り返される重要な作業である。しかし、合奏に用いる楽器を構成する全ての竹筒を一本ずつ吹き鳴らして順に音を聴き比べ、竹筒を薄く削るか差し替えて音高を調整することは、多大な時間と労力を要する困難な作業である。また、竹筒はときにひび割れ、虫に喰われ、腐食する。演奏者はその都度、新たな竹筒を調達して楽器を修理し、再び調律を施す必要に迫られる。竹製パンパイプスをめぐる社会的過程には、不安定性をはらむ竹という植物素材が含まれることで、制御困難な部分が生じているのである。

ところで近年、商業化が進みグローバルな音楽市場との結びつきを強める中で、竹製パンパイプスの演奏にはマイクやスピーカー、ミキサーといった音響機器が導入されている。そのひとつに電子調律機（electronic tuner）がある。竹製パンパイプスの音高を調整する作業は、電子調律機の導入により、安定的な基準の存在を措定し技術的な効率性を指向するものに変わりつつある。筆者の調査村を拠点とする演奏集団も、2005 年頃に海外の音楽プロデューサーを介して日本製の電子調律機を入手していた。ただし、筆者が現地に滞在していた 2012 年の時点でそれはすでに故障していた。ソロモン諸島国内では不具合を修理できなかったのである。演奏集団のメンバーたちは、電子調律機を用いた音高の調整がいかに確実で簡便だったかを筆者に語り、「あの機械が使えれば」と嘆息しつつ、自らの耳を用いて音高を調整する作業を延々と続けていた。また、演奏集団のリーダーは、いつか修理の機会がおとずれることを期待して壊れた電子調律機を捨てずに仕舞いこんでいた。このように筆者の調査村において電子調律機は、故障した後も安定的な基準とその不在を同時に想起させ、技術的な効率性とその未達成を象徴するモノとして働いていた。脆弱性をはらむ音響機器を含むことで、竹製パンパイプスをめぐる社会的過程に、さらに制御困難な部分が生まれているのである。

本共同研究の最終年度である 2016 年には 3 回の研究会が予定されている。本稿で取り上げた音楽のほか、映像や影絵、演劇における役柄といった、それ自体はモノではないが、ときにモノのように立ち現れる存在についての検討を含め、個々のテーマについて議論を深めていく。また、研究成果公開のための準備も進めていく予定である。

**【参考文献】**


Bates, Eliot 2012 The Social Life of Musical Instruments. *Ethnomusicology* 56(3): 363-395.

Born, Georgina 2010 For a Relational Musicology: Music and Interdisciplinarity, Beyond the Practice Turn. *Journal of the Royal Musical Association* 25: 205-243.

—— 2013 Music: Ontology, Agency, Creativity. In Chua, Liana and Mark Elliott (eds.) *Distributed Objects: Meaning and Mattering after Alfred Gell*. pp. 130-154. New York & Oxford: Berghahn.

Geerts, Peter 1970 *'Are'are Dictionary: Pacific Linguistics C-14*. Canberra: Australian National University.

Henderson, C. R. and I. R. Hancock 1988 *A Guide to the Useful Plants of Solomon Islands*. Honiara: Research Department, Ministry of Agriculture and Lands.

Zemp, Hugo 1979 Aspects of 'Are'are Musical Theory. *Ethnomusicology* 23(1): 5-48.

吉田ゆか子 2015「芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点の探求」『民博通信』150: 22-23。



**さもと ひでのり**

筑波大学大学院博士後期課程。日本学術振興会特別研究員 DC2。専門は文化人類学、オセアニア研究。著作に「土地をめぐる軋轢と土地保有の図式──現代ソロモン諸島マライタ島南部アレアレにおける土地をめぐる表象」『日本オセアニア学会 Newsletter』104 号（2012 年）など。